

剣を鋤に 槍を鎌に

【聖書】 イザヤ書2章1～5節 終末の平和

アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。終わりの日に／主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち／どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい多くの民が来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから／御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

【序】 聖書を読む信仰

聖書は、旧約聖書と新約聖書から成り立っています。旧約聖書は、律法と呼ばれているモーセ5書と歴史、文学、予言書の39巻、新約聖書は福音書、使徒言行録、使徒書簡、黙示録の27巻、合計66巻の文書から成り立っています。

救い主キリストが来りたもうことを待ち望みつつ生きた人々の信仰の証を書き記した旧約聖書。その救い主がナザレのイエスとしてこの世に来て下さり、出会って救いにあずかった者の証しと、救い主が新しい天と地をもたらして下さる終末の黙示録が新約聖書です。

内村鑑三は聖書研究の著述活動を通して、聖書の信仰を大勢の日本人に紹介した功労者ですが、こう述べています。「聖書66巻を通読してみて、我々は**明白な一事**の印象を得る。それは、**救われる道はイエス・キリストによる以外、天下になし**ということである」「**キリスト教は聖書の中にあり、キリスト教は聖書である**。その理由は、聖書のすべてがキリストについてあかしをし、キリスト以外に救いのないことを、我々に示してくれるからである」(「内村鑑三談話」)。

ですから私たちはとにかく**聖書を読まなければなりません**。聖書を読むことによって、私たちの信仰は養われ、豊かな信仰生活を送ることが出来るのです。そこで川越教会では、聖書全巻を皆で学び合うカリキュラムを持つ「**聖書教育**」誌を参考書として用い、分級や祈祷会、そして礼拝説教も同じ箇所から聖書のメッセージを汲み取ることにしております。

そのカリキュラムに従って、5月と6月は旧約聖書の**イザヤ書**、**エレミヤ書**の中から、神に選ばれた**預言者の働き**を学んで参ります。この機会に二ヶ月かけてイザヤ書66章とエレミヤ書52章を通読してはいかがでしょうか。

【1】 平和の幻と日本の現実

さて**イザヤ**は、主イエスの誕生よりも**740年ほど前**に、南ユダ王国のウジヤ王が死んだ年に、神さまから預言者として召されました。20才くらいでした。これについては来週学びます。そして**60年ほ**

ど予言者として神さまに用いられました。

新共同訳聖書では、今日の箇所には「終末の平和」という小見出しがついています。終末——今のこの世は終わり、新しい神の世界がもたらされる時です。その時にどのような光景が起こるかを、イザヤは示されたのでした。歴史の究極ですね。

主の神殿の山を目指して、世界中の国々から人々が大河のように流れ集まり、口々に語り合います。「さあ、主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主がわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」。ヤコブの神とは、イスラエルの民を通してご自分を現しておられる主なる神、もっと一般的に言えば、旧約聖書に証されている神の意味です。

主なる神は、国々の争いを裁き、多くの民を戒められます。すると人々は、剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。そして国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばなくなります。人を殺す武器を農具に作り変えてしまうとは、兵隊がいなくなって、皆が農夫になり、命を豊かに養う農作業に励むようになることですね。どうやって戦争に勝つかと戦術を練り、武器を備えて兵隊に勝ち方を教える職業軍人が居なくなる世界です。何と素晴らしい世界でしょうか。

一昨日は憲法記念日でした。日本国憲法は、1945年8月15日に日本が無条件降伏した翌年11月3日に大日本帝国憲法に代わって公布され、半年後の1947年5月3日から施行されるようになりました。しかし憲法改正の声が自民党政権になり、再び高まってきました。

前文を読み返してみました。「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」。「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」。

続いて第9条です。「1. 本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇、または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。2. 前項の目的を達するため、陸海空その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」

「日本国政府の行為によって戦争を起こさない」「国際紛争を解決する手段としての戦争や武力の行使を永久に放棄し、軍隊を保持しない」という言葉、これはまさにイザヤが幻に見た言葉、「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」そのものではないでしょうか。

しかしこの憲法が施行されてから3年後の1960年6月に、北朝鮮が南朝鮮に攻め込む朝鮮戦争が起こると、日本に駐留するアメリカ軍が戦場に派遣されることになり、手薄になる国内の治安維持

のためにと、**警察予備隊**が発足しました。そしてやがてそれが保安隊、**自衛隊**へと衣替えして、昨年自民党が発表した憲法改正草案では、**国防軍**の保持と明記されるように、情勢が変わってきました。確かに竹島・尖閣諸島の領有権をめぐる、韓国・中国との対立が鮮明になりました。中国では国防費を莫大に増やして**軍備の刷新強化**が進められています。日本もそれに対抗して、軍備を強化しなければならないのでしょうか。

韓国との首脳会談、中国との外相会談が、大臣や国会議員 168 人の**靖国神社集団参拝**でご破算になりました。「国のために命を捧げた英霊に敬意と感謝を表すのは当然だ」と政治家たちは言います。でも憲法前文ではこう宣言しているのです。「どの国でも自分のことのみ専念して、**他国を無視してはならない**という**政治道徳**は普遍的なもので、平和を愛する**諸国民の公正と信義に信頼**して、我らの安全と生存を保持しようと決意した」。

自分たちを植民地支配した日本に対する**韓国民の怨念**、また中国は日本との 15 年戦争で **2000 万人の国民が命を失った**と言っています。その戦争を指導した責任を問われて東京裁判で死刑に処せられた**A級戦犯7人**も、靖国神社は英霊として祀っているのです。そこで日本の政治家たちの行動は、韓国・中国に対するかつての**侵略戦争**を支持表明するデモ行進と受け取られたのです。これは憲法前文で言われている「自分のことのみ専念して他国を無視する行為、普遍的な政治道徳に反する行為」に当たるのではないのでしょうか。

私たちは、韓国・中国国民の平和を愛する**公正と信義に深く信頼**することで、日本の国の**安全と生存を保持**するのだという決意を、ことあるごとに示していくことこそが日本の政治家の任務だと思います。「足を踏まれた者の傷みを、踏んだ者は気がつかない」と言われます。韓国、中国はじめ**近隣諸国に与えた大きな苦痛**を、私たち日本人はよくよく自覚した上で、互いに**信頼を深めて**共に生きていかなければなりません。これを自虐的思考だと片付けては、平和は生まれません。

[2] 善悪の基準は唯一つ

もう一度イザヤの予言を読み返してみましよう。どうして世界中の国々から人々が大河のように流れ集まって来るのでしょうか。神の家に行こうというのでしょうか。主なる神さまが私たち皆の**歩むべき道**を、示されるからです。国々の争いを**正しく裁き**、多くの民を**戒めて下さる**からです。国々が軍備を捨てようと協議を重ねることで世界平和がつくり出されるのではなくて、神さまが御言葉によって争いを裁き、人々が聞き従って和解するから、武器が農具に変えられるのです。

心を注いで物事に励むことを**一生懸命**と言います。しかし元々は一**所懸命**から出た言葉です。命がけで領地争いをしたことから生まれました。利害の対立、争いは殺し合いに及ぶ**人間の現実**を物語っています。だから昔から**戦争**が絶え間なく繰り返されてきました。死んでしまうくらいなら相手に**譲って**仲良く暮した方がどれほどよいか知れないのに、それがどうしても出来ません。私たちの**罪深さ**ですね。

聖書に出てくる**最初の殺人**は兄カインが弟アベルを殺した事件です。それぞれが働いて得た収穫を神さまに献げたところ、神さまはアベルの献げものをお受け取りになりました。そこでカインは激しく怒って、アベルを殺してしまったのです(創世記4:8)。何故なのだろうかと冷静に原因を**尋ね、反省し**、神さまに受けいられるように**自分を変えていこう**とする行動が、どうしてとれなかったのでしょうか。

彼らの親、アダムとエバは楽園に暮していました。**楽園の条件**は唯一つ「**善悪の知識の木からは決して食べてはならない**」でした。しかし彼らは誘惑に負けて食べてしまいました。その結果楽園を失ってしまいました。そうです。**善悪の基準は唯一つ**でなければなりません。これが人によって違えば、**判断の違い**から利害の衝突、争いが起こるのは当然です。神さまへの献げ物にしても、カインが自分の判断よりも**神さまの判断**をたずね求めようとすれば、怒り狂って弟を殺すことなどしなかったでしょう。

善悪の基準は唯一つ、天地万物を極めて良いものとして創造し、世界を楽園として支配していこうとされた**主なる神さま**が、私たちにお示しになるのです。争いが起こった時には、この主なる神さまの裁きと戒めに皆が**聞き従う**ならば、もはや戦争はなくなります。「**主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう**」。「**ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう**」。そうです。この世界から武器がなくなり、殺し合う戦争がなくなり、私たちは皆、平和と喜びに溢れた光の中を歩めるのです。

[結] 楽園をもたらす十字架

イザヤ書 11 章 1～10 節をお開きください。タイトルは「**平和の王**」です。イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスを待つ待降節に読まれるイザヤの予言です。「**エッサイの株からひとつの芽が萌えいで**」。新約聖書はイエス・キリストの系図で始まります。そのマタイ1章6節に「**エッサイはダビデ王をもうけた**」とあります。ですから「**エッサイの株から**」とは**ダビデ王の子孫から**主の霊が豊かに注がれた**救い主**が誕生するという予言です。

その救い主は「**弱い人のために**正当な裁きを行い、この地の**貧しい人**を公平に弁護する。**正義**をその腰の帯とし、**真実**をその身に帯びる」お方です。そのお方の裁きのもとでは、**どのような世界**が生まれるか、それが6節以下です。それは弱肉強食のない世界です。狼も豹も子羊や小さい子どもと共に育ち、害を加えるものがない、滅びのない世界、**生きとし生けるもの全てが平和に共存する世界**です。

ダビデの家系から **1000 年後**に、ベツレヘムの馬小屋で誕生した**イエス・キリスト**は、弱い者、貧しい者、悲しむ者、虐げられている者と共に生きて、慰め、励まし、助けて生涯を送られました。そして最後には**十字架**にかけられながら、「父よ、彼らをお赦してください」と祈りつつ、自分を十字架につけた**人々の罪**をもご**自分の身に引き受けて**死んで下さいました。一切の暴力を否定し、愛し合い重荷を負い合って共に生きていく**十字架による平和の道**をお開きになりました。

世界の究極の平和は、この十字架の救い主イエス・キリストのもとに、全ての人が集まり、その御言葉を聞き、示される**愛の道**を歩むことによってもたらされるのです。旧約聖書の初めに、神さまがお造りになった世界を楽園としていた**一本の木**、それは新約聖書に至って、**十字架**であることが示されました。十字架を仰いでイエス・キリストの言葉を聞き、示された道を歩む時、私たちは**剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とし**、もはや戦うことを学ばない者に、**変えられていく**のです。

私たちが生きている世界では、利害の対立から武器を手にとって殺し合う紛争、戦争が絶えません。そのなかで戦争や武力で国際紛争の解決を決してしないと宣言する**日本国憲法の平和主義**は、非現実的だと言われます。しかし日本人 310 万人、アジア諸国の人々 3000 万人近くの命を奪った戦争をした私たちなのです。もう絶対に戦争の悲劇は繰り返さないと誰しもが抱いた**決意**を貫くことこそが、**日本国民の責任**であり、**使命**ではないでしょうか。

強くなることで自分を守ろうとするのではなく、**力を捨て**、身を低くして**弱さに仕え**、我が身を献げていく愛をもって、皆と共に生きて行く道**を歩もう**ではありませんか。**平和を愛する諸国民の公正と信義**に、徹底して信頼を寄せていこうではありませんか。そのために、命を捨てて人に仕える**十字架の愛**に生きていく者になって参りましょう。**十字架の福音**を一人でも多くの方々に証して参りましょう。

完